



## 《安全管理》 MRSA 感染率

---

### <項目解説>

MRSA (methicillin-resistant staphylococcus aureus) とは、 $\beta$ -ラクタム系抗菌薬をはじめとする多くの抗菌薬に、耐性を示す黄色ブドウ球菌のことで、難治性の感染症を引き起こす病原菌として知られています。正常な免疫機能を持っている人にはほとんど問題にはならない細菌ですが、免疫力の低下した重症患者や高齢者、乳幼児などに感染すると、大変危険な状況を引き起こします。それによって入院期間の延長や医療費の増大にもつながります。MRSA 感染率の評価をすることは院内感染対策の指標の1つとなります。

### <当院の実績>

---

【平成24年度】	0.01%
【平成25年度】	0.03%
【平成26年度】	0.01%

### <当院の自己点検評価>

---

MRSA(黄色ブドウ球菌)は非常にありふれた菌で、私たちの髪の毛や皮膚、鼻の粘膜、口腔内、傷口などによく付着しています。

しかし、基本的に弱毒菌のため、私たちの抵抗力がしっかりあれば特に重症化することはありませんが、①無菌室が必要になるくらい抵抗力が低下した場合、②大手術の後、③重症の熱傷(やけど)を負った場合、④血管内にカテーテルを長時間入れている場合、などでMRSAに感染すると様々な病気を起こしやすく、なおかつ治療しにくい状態となります。

従って、当院では医療行為の前後には手洗い・手指消毒の徹底や手袋の着用などマニュアルに基づいて、院内の感染防止に努めています。

### <定義>

---

#### 新規 MRSA 感染率

感染率の単位は、「‰」(パーミル=1/1000)を用いての算出する場合がありますが、ここでは、一般的に馴染みがある「%」を単位とします。

### <算式>

---

分子：新規MRSA感染患者数  
分母：入院患者延べ数



## 《安全管理》 転倒転落発生率

---

### ＜項目解説＞

転倒転落は、患者さまの年齢や認知力により発生に差が生じると言われています。それは、患者さまが普段過ごしている生活の場と異なる病院の環境に適応する力に年齢や認知力が影響を及ぼすためです。転倒転落により外傷や打撲だけでなく、骨折・脳出血など重大な障害をおこす事もあり、これにより患者さまに後遺症を残す事もあります。転倒転落をおこしやすい患者さまをアセスメントシートで認識し、予防の計画立案及び計画の実施を評価します。

### ＜当院の実績＞

---

【平成24年度】	転倒転落発生率	0.3%
	障害を伴う転倒転落発生率	0.011%
【平成25年度】	転倒転落発生率	0.3%
	障害を伴う転倒転落発生率	0.018%
【平成26年度】	転倒転落発生率	0.3%
	障害を伴う転倒転落発生率	0.021%

### ＜当院の自己点検評価＞

---

高齢者においては立位能力・歩行能力が低下し転倒の危険性が高くなっており、65歳以上の高齢者の約1/3が1年間に1回あるいはそれ以上、転倒経験があることが報告されています。

転倒の経験は身体的・精神的に悪影響を及ぼし、健やかな老後生活の妨げとなり、高齢者のQuality of life(QOL)を著しく低下させる要因となりますので、入院中の転倒・転落に伴う骨折および外傷を予防する取り組みを続けてまいります。

### ＜定義＞

---

セーフティレポートによる転倒転落の発生率

### ＜算式＞

---

転倒転落発生率 分子：セーフティレポートによる転倒転落件数  
分母：入院延べ患者数

障害を伴う転倒転落発生率 分子：セーフティレポートによる影響レベル3以上の転倒転落発生件数  
分母：入院延べ患者数



## 《安全管理》 肺血栓塞栓症予防管理料算定率

---

### <項目解説>

---

肺血栓塞栓症は血栓(血のかたまり)が肺動脈に詰まり、呼吸困難や胸痛を引き起こす疾患であり、程度によっては死に至る場合もあります。長期臥床や骨盤部の手術後に発症することが多く、エコノミークラス症候群も肺塞栓症の一種ですが、入院中においては適切な診療によりかなりの部分が予防可能で、リスクレベルに応じた予防法（弾性ストッキングまたは間歇的空気圧迫法等）が推奨されており、発生率の低下への取り組みを行っています。

本指標により、肺血栓塞栓症予防に対する病院全体の取り組みを評価します。

### <当院の実績>

---

【平成24年度】	15.7%
【平成25年度】	10.4%
【平成26年度】	9.3%

### <当院の自己点検評価>

---

発症の危険が小さい低リスクの場合は手術後なるべく早くベッドを離れて歩いたり、運動したりすることが基本となりますが、中リスク以上では、弾力のあるストッキングや空気圧でマッサージする機械を使う「間欠的空気圧迫法」と呼ばれる方法で足を圧迫し、血流が滞るのを防ぐ方法が有効とされています。

さらに発症の恐れが高い場合、血液を固まりにくくする「ヘパリン」など血液凝固防止薬を使用するなど、リスクに応じた対応を行うことにより発症率の低下に取り組んで参ります。

### <定義>

---

肺血栓塞栓症予防管理料算定率

### <算式>

---

分子：入院中に肺血栓塞栓症予防管理料を算定した患者数

分母：全退院患者数



《安全管理》 じょくそう 褥瘡発生率

---

<項目解説>

---

褥瘡（床ずれ）は患者さまのQOL（生活の質）の低下をきたし、結果的に在院日数の長期化や医療費の増大にもつながります。そのため、褥瘡予防対策は患者さまに提供されるべき医療の重要な項目の1つであり、1998年からは診療報酬にも反映されています。

褥瘡の治療は、発生予防がより重要となるため、知識の蓄積、予防の計画、予防の実施にかかる総合力が鍵となります。

<当院の実績>

---

【平成24年度】	1.0%
【平成25年度】	0.8%
【平成26年度】	0.5%

<当院の自己点検評価>

---

褥瘡の予防ならびに早期発見のためには、職員全員が褥瘡に関心を持つ事が重要です。

そのためにすべての看護職員を対象とした研修を実施しており、その内容はベッド挙上による体のズレの体験、エアーマットの適正圧のチェック方法の会得、体位変換枕の当て方、スキンケアなどを実施しています。

この研修を通して褥瘡への理解を深め、早期発見、院内褥瘡発生率低下につなげていきたいと考えています。

<定義>

---

褥瘡発生率（入院してから新しく褥瘡を作った患者数の比率）

<算式>

---

分子：新規褥瘡発生患者数

分母：入院患者実数